

京都文教短期大学における旧学生寮の建築構成

—二燈寮と月影寮を事例として—

山田 智子

1963年竣工の二燈寮と1968年竣工の月影寮について、確認申請図面等から建築計画と構造・設備等を比較し分析した。その結果、本学学生寮の建築の特徴は、仏間が付設した大広間とピアノレッスン室、ミシン・アイロン室等の学科のカリキュラムに対応した設備空間が設置されたことである。学生数の急増に伴い、寮室の収容定員を増やし、管理棟を充実化させた。一方で建設当初流行したダストシュートや水洗の和式便器等を備えたが短期間で陳腐化し、屋上は活用されなくなった。

キーワード：京都家政短期大学、寄宿舎、学生寮、女子高等教育

1. はじめに

学校に付属する寄宿舎（学生寮）の歴史は古く、我が国では教育と学習が共同生活の場で行われた僧房、塾舎などにその源流がみられる¹⁾。近代では学生寮は旧制高等学校に設置されたものが開明的であり、その教育は寮舎を含む学内外の生活の自治・自律の精神が尊重されていたという²⁾。

女子高等教育機関の学生寮は、明治初期開設のミッションスクールに付設されたものが先駆であり、東京女子大が1922（大正11）年に建てた校舎は寮舎が中心で、当時としてはRC造の立派なものであった³⁾。

このように学生寮の歴史は古いですが、現在では共同生活の窮屈さから民間のワンルームマンションを借りて下宿する学生が多くなり、本学でも学生寮は1994（平成6）年に閉寮している。

2024（令和6）年、京都文教学園は120周年を迎える。そこで本学の学生寮の歴史を今一度振り返る⁴⁾。1904（明治37）年、仮校舎として因幡薬師に開学した私立高等家政女学校が本学園の始まりである。その教育目的は「裁縫を中心

とした技芸、家政に堪能な良妻賢母の養成」⁵⁾であり、仏教主義に基づいて生徒の徳性を陶冶することも大方針とされた⁶⁾。1960（昭和35）年に家政学園短期大学（1961年に京都家政短期大学に名称変更）が岡崎で開学した。教育目的は「家庭女性に必要な技能に学問的基礎を与えようとするもの」⁷⁾であった。開学当初は臨時に知恩寮が開設され、1年後に家政学園内に白河寮が建設された。1963（昭和38）年には城陽市に二燈寮が竣工し、1966（昭和41）年には入寮希望者の急増に伴い、向島の建て売りのアパートを購入して観月寮とした。1967（昭和42）年に短期大学が現在地の宇治市槇島町に移転した。同年には家政科と服飾意匠科の定員を大幅に増やし、1968年には短期大学内に月影寮が竣工した。また月影寮の増築時に応急措置的に開設した黄檗寮という臨時の寮もあった。

以上のように、少子化が浸透する現在からは想像し難いが、1960年代には学生数の急増に対応して学生寮が次々に建設されていったことがわかる。

そこで、本研究では1963（昭和38）年竣工の

二燈寮と1968（昭和43）年竣工の月影寮について、わずか5年間に学生寮が場所を変えて相次いで建設されたことに着目し、2つの学生寮の建築計画と構造・設備等を比較し、分析することで、当時の本学の寄宿舍建築の特徴を明らかにしたい。1950（昭和25）年に建築基準法が制定され、特殊建築物である寄宿舍の平面計画や構造等はこの法律に則って建てられているのは当然であるが、個々の建物がどのような思いで建てられたかを把握する必要がある。また本学の教育目的から、学生寮の建築計画との関連性を意義づける。

2. 資料

二燈寮の資料はわずかしがなく、法人事務局庶務部施設課所蔵の『二燈寮設計審査申請書』綴を使用した。この申請書は、1962（昭和37）年7月30日に「住宅金融公庫融資住宅 設計審査申請書（共同宿舍）」として学校法人家政学園理事長 三枝樹正道が京都府宇治事務所に申請し、同年9月27日に許可されたものである。

申請建物の住所は「京都府久世郡城陽町大字久世小字下大谷八番地四」で、現在の京都文教短期大学附属家政城陽幼稚園の北側の敷地である。設計は吉村建築設計事務所である。鉄筋コンクリート造4階建て1棟で、建築面積は821.19㎡、住宅部分の延床面積は1600㎡、100人を収容し1人あたりの面積（共有部分含む）を16㎡としていた。着工予定日が昭和37年9月1日、竣工予定日が昭和38年4月30日と記載されているので工期は8ヶ月間である。

また吉村建築設計事務所が作成した予算見積書と鉄筋コンクリート造一般仕様書及び付近見取図・配置図・各階平面図・立面図・断面図・平面詳細図・仕上表等各種設計図の図面一式が添付されている。図面はすべて青焼きで、しかも

手書きで修正し押印している箇所がある。

なお二燈寮については第二期工事として別館が増築された⁸⁾が、その資料は発見できなかった。

月影寮の資料は、『月影寮第二期工事建築確認通知書』綴を主に使用した。この確認通知書は、1972（昭和47）年7月12日に学校法人家政学園理事長大橋理一郎が京都府宇治事務所に申請し、同年8月2日に確認されたものである。第一期工事として1968（昭和43）年に管理棟と寄宿舍棟（鉄筋コンクリート造5階建て）と浴室棟がすでに完成しているので、この確認書はその増築工事に関わる書類である。第一期工事で建設された寄宿舍棟の図面も掲載されており、全貌を知ることができる。

申請建物の住所は「京都府宇治市横島町清水31、32、33-2」で、京都家政短期大学の隣接地であり、学内寄宿舍である。設計は二燈寮と同じ吉村建築設計事務所である。

第二期工事では鉄筋コンクリート造4階建ての寄宿舍1棟の建設と鉄筋コンクリート造の管理棟1棟を平家から2階建てにする増築計画がされ、増築に伴う収容定員は164名となる。第一期工事では5階建て1棟の寮室は48室（1室4名）、収容定員192名であった⁹⁾ので、2棟合わせた収容定員は356名となった。

第二期工事の建築面積は増築部全体で466.8121㎡、延べ面積が1977.459㎡、うち寄宿舍棟の1～4階の床面積は340.8075㎡、屋上22.125㎡、管理棟増築部分の床面積は1階が55.487㎡、2階が536.617㎡と記載されている。着工予定日が昭和47年8月1日、竣工予定日が昭和48年2月末日で工期は5ヶ月間である。

確認通知書には付近見取図・配置図・各階平面図・立面図・断面図・平面詳細図・仕上表等各種設計図（青焼き）の図面一式と構造強度計

算書が添付されている。

その他の設計図書は以下を参考にした。

「京都家政短期大学設計図綴」吉村建築設計事務所

「京都家政短期大学“寄宿舍”新築工事建築工事設計図」

「月影寮増築工事竣工図」

「月影寮新館増築工事」

また、寄宿舍の生活環境がわかるものとして以下の資料を参照した。

『思い出 purizumu』昭和54年度二燈寮文集
『お元気で』卒業卒寮記念文集 月影寮 1974
(昭和49)年2月、1975年2月、1976年2月、
1979年2月、1980年2月、1981年2月、1987年
2月、1988年2月、1991年2月、1993年2月、
1994年2月、1995年2月

3. 二燈寮の特徴

3-1. 平面計画

平面は3つの部分に分けることができる。北側の管理棟（平家建て）、中央の寮室棟（4階建て）、南の浴室棟（2階建て）である（図1）。

東西に長い敷地に寄宿舍は東西方向に長くして南向きに建てられている。まず敷地へは東西に走る道路の南面中央やや西寄りの門から入る。この門の正面に平家建ての管理棟があり、中央に食堂を設け、向かって右（西）側が玄関と応接室でその奥が事務室と管理人室（8畳）と台所・和室（3畳）・便所になっている。食堂を挟んで向かって左（東）側は食堂の厨房で、それに食品庫・和室（6畳）・便所が付設する。食品庫の裏側には廊下側から入るカウンセリング室が設置されている。青焼きの図面には後から工事内容を変更した箇所に手描きで修正が加えられ、修正者が押印している。それによると、食堂・事務室・厨房に「天マド採光（プリズムグ

ラス）」と書き込みがある。おそらく食堂は北側にあるため、北側が連続した突き出し窓となっても十分な採光が得られず、法律上の採光有効面積を確保しつつ、より明るさを稼ぐために改善されたものであろう。同様のことは立面図に示された書き込みからも読み取れ、厨房に窓が追加され、管理人室横の和室（3畳）の横長窓が縦長窓に変更されている。

管理棟の背後には寮室棟があり、東西に長い廊下を設け、この廊下に沿って南側に寮室10室と宿直室・休養室（医務室）・洗面所・便所・階段を設置する。また、廊下北側の2箇所にダストシュートが設けられている。

そしてその中央をさらに南側に突き出して浴室棟とし、ボイラー室・脱衣室・浴室を配置している。階段はこの突出部をはさんで2箇所設けられ法規上の2方向避難が成立している。2階へはこれらの階段で上がる。

2階は、管理棟の上階がデッキになっており、寮室北側の廊下から外に出ることができる。寮室は階段・便所をはさんで西側6室、東側6室の計12室を並べる。浴室棟上部は集会室（娯楽室）を広く取り、その奥（南）にピアノ室3室とミシン・アイロン室を設置している。

3-4階は北側を廊下にして寮室が2階と同じ配列で並べられている。便所と洗面所は同室で、便房が3つあり和式便所、スクリーンを挟んで洗面流しと掃除用流しが設置されている。この形式は各階で共通している。

屋上へは東側の階段でアクセスできるが、「干場」には手描きで「取り止め」という文字があるので変更されたと思われる。この時代の集合住宅では屋上は物干場としてよく利用されていたのだが、実際はどうであったか不明である。また洗濯場も描かれていないので、第二期工事で追加した可能性もあろう。

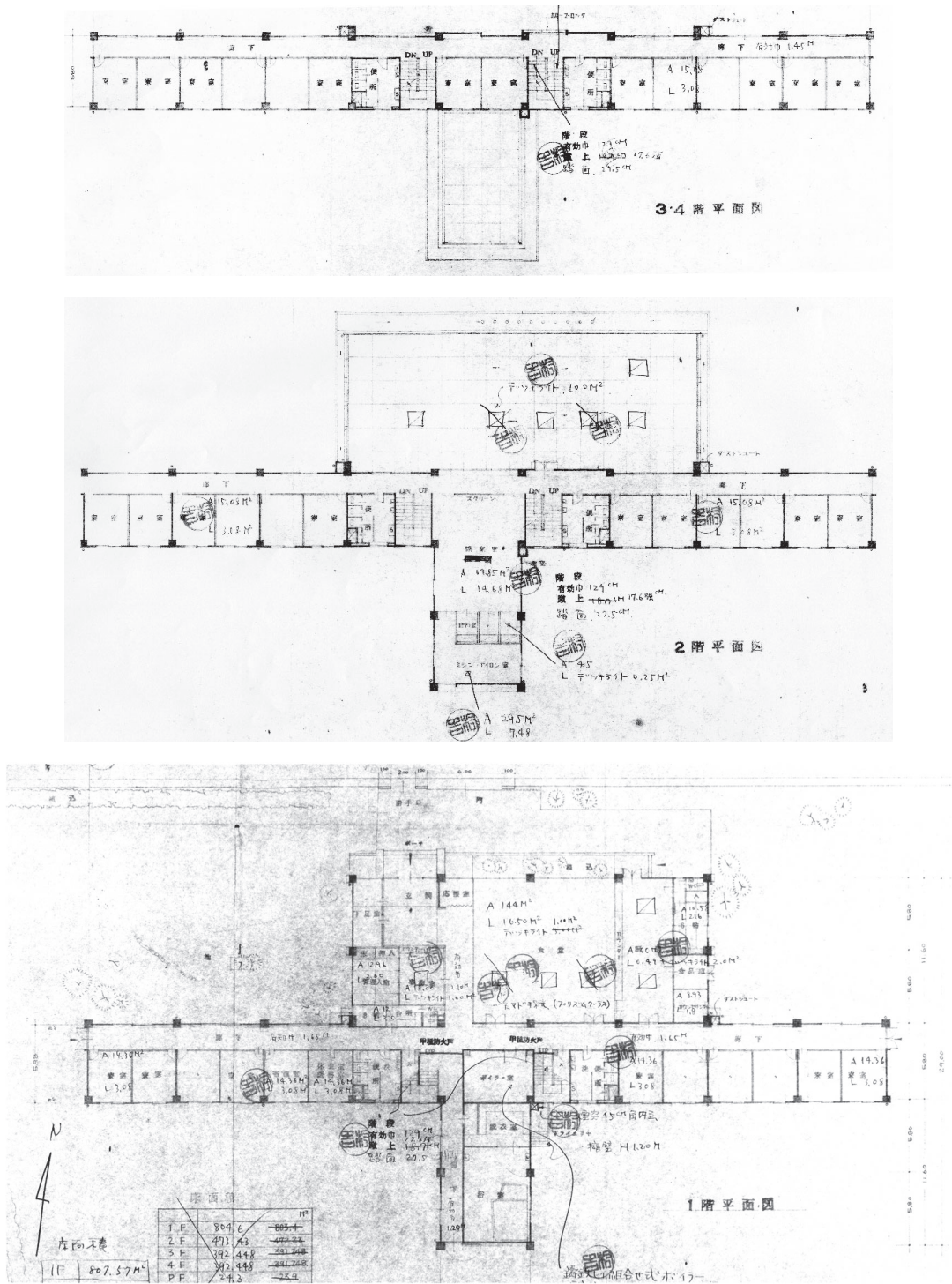


図1 二燈寮平面図 (下から1階・2階・3・4階)

3-2. 立面

北側立面が正面となる（図2）。陸屋根で同じ形式のアルミサッシの窓が整然と並ぶ画一的なスタイルであるが、表情を造っているのは穴あきの陶製ホローブロックである。ホローブロックは当時流行した材料で、モダンデザインの建物に採用された。2階の中央東よりの外壁から屋上階段室まで正面外壁に充填され、その周囲の外壁をタイル貼りにする。その他の外壁は色モルタル吹き付けである。

3-3. 寮室

寮室は壁芯々で幅 3,600mm 奥行 3,950mm あるので面積は約 14.22㎡である（図3）。天井高は 1-3 階が 2,820mm、4 階は吊り天井としており 2,600mm である。幅 60cm のロッカー 2 台と掃除用具入れ 1 台が造り付け家具として描かれているので、ここが 3 人部屋¹⁰⁾ というのはロッカーが 2 台しかないので不自然である。また、手描きで修正した箇所があり、1-3 階はロッカーの幅を 60cm から 90cm に変更し、4 階は 100cm に変更している。ロッカーには下部に 3 段引出、上部は天袋が付属しているのでひとり 1 台のロッカーを使用するとすると十分すぎるともいえる。

約 14.22㎡の部屋にベッドと机を各 3 台ずつ設置するとかかなり窮屈だと想像するが、資料¹¹⁾では 2 段ベッドが使われておらず、造り付けの家具以外は低い家具ばかりなので圧迫感は余り感じなかったのではないだろうか。

各寮室にはドア上部に開閉できる欄間が付属し、また外壁の腰窓の横には換気口を手描きで加筆している。この換気口は当初窓下に設計されていたが、窓下にはスチーム暖房機が設置されるので、窓の横に移設されたと推測できる。全館スチーム暖房が入っている所以窓の開閉を意識せずに自然換気できるように考えられてお

り、全体として換気にはかなり注意を払っていたように見受けられる。

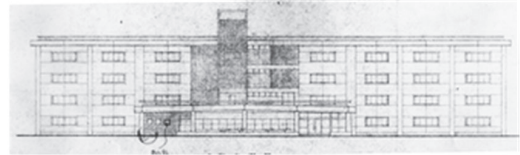


図2 二燈寮北側立面図

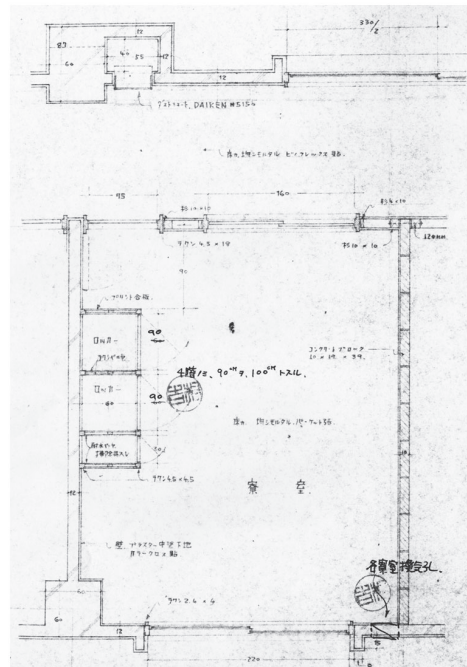


図3 二燈寮寮室平面図

3-4. 設備

浴室には、床と同じモザイクタイル貼りの大小 2 つの浴槽が壁際に設置されている。壁は目の高さまで 75mm 角のタイル貼りで上部は碎石リシン仕上、天井はりシン仕上である。給排水 1 階配管図によると、蛇口が西の壁面に 5 台付けられ、脱衣室に近い西面と東面の壁面に洗面器らしきものが描かれている。

浄化槽が設置されているため、各階には水洗便器（すべて和式）が設置され器具表には洗髪

器が記入されているので各階の洗面所に設置されていたとみられる。

またスチーム暖房設備と火災感知器が各階に設置されていた。

寮室には吊り下げ式の蛍光灯が設置され、コンセントが窓際に3箇所設けられていた。

3-5. 構造

東西方向の柱間が7,200mm、南北方向の柱間が5,800mmのラーメン構造の鉄筋コンクリート造である。寮室の幅は東西方向の柱間7,200mmにコンクリートブロックを入れて2等分したもので、奥行は5,800mmから廊下幅を引いたものとなる。寄宿舍棟屋上と管理棟の屋上はパラペットに手摺りがついた陸屋根である。

4. 月影寮の特徴

4-1. 平面計画

月影寮は、学内にはあるが、居住施設であるため教室とは隔てられるように短期大学敷地東北部の奥まった場所に配置されている(図4)。といっても寮舎横は広大なグラウンドである。そこで寮舎の正面には低い塀を建て、建物下部に植え込みのスペースを設け、プライベートゾーンとして区切りをつけている。

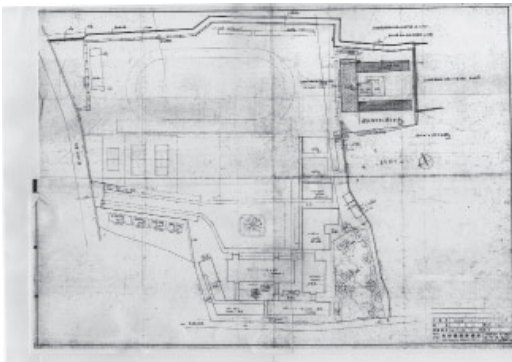


図4 月影寮学内配置図(着色部分が月影寮)

第一期工事で平家建ての管理棟と5階建ての寮室棟と2階建ての浴室棟が建設された。当時、管理棟の1階には食堂はなく、集会室と予備室になっていたの、第二期工事で食堂ができるまでは学内の食堂で食事をとっていたようである。第二期工事では、平家建ての管理棟に2階と一部平家を増築し、4階建ての寮室棟を増築している。いずれも鉄筋コンクリート造である。

第二期工事後の全体の平面計画を概観すると、東西に長い敷地の西側に管理棟を配置し、その背後に寮室棟を南面するように南北に2棟(北翼・南翼)建てている。北翼は5階建てで第一期工事、南翼は4階建てで第二期工事で配置された。2棟の寮室棟に挟まれた場所には浴室棟(一部2階建て)が置かれた(図5・6)。

玄関は中央南寄りに設けており、玄関の南側(向かって右側)に事務室・面会室2室・和室(6畳)2室・台所・便所・浴室等が設けられている。玄関の北側(向かって左側)には第二期工事で集会室を改装した寮生の食堂があり、北側カウンターの奥は盛り付けスペースや食器洗浄消毒格納スペース・二次加工処理スペースが設けられていた。当初は仕出しを利用しており、火気を使用して調理できる厨房は設置されていなかった。第二期工事ではこの食器洗浄消毒格納スペース・二次加工処理スペースが拡張されている。第二期工事では管理棟の2階を増築して集会室(和室110畳)、ミシンアイロン室(図面にある名称で記載)、寮母室(2室)、医務室(2室)が計画された。寮母室にはキッチンが設けられ宿泊できるので寮の管理体制が改善されたといえる。だが、大きな特徴は2階に増築された集会室だろう。この集会室は和室で110畳敷きの大広間である。北側には仏間として仏壇が置かれているので、礼拝も兼ねていたことがわかる。この集会室は人数に応じて部屋の広さを

調節できるようにパーティションとなる「スライディングドア」が4箇所設置され、南側のミシンアイロン室の床は畳敷きではないが、

この部屋も「スライディングドア」で集会室と隔てているだけなので全部開放すると約160畳の大空間となる。

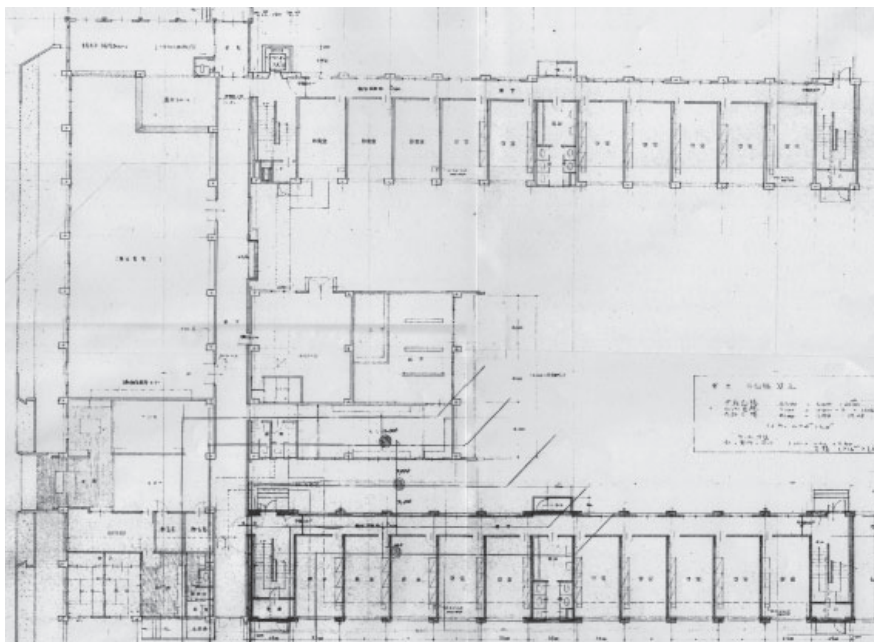
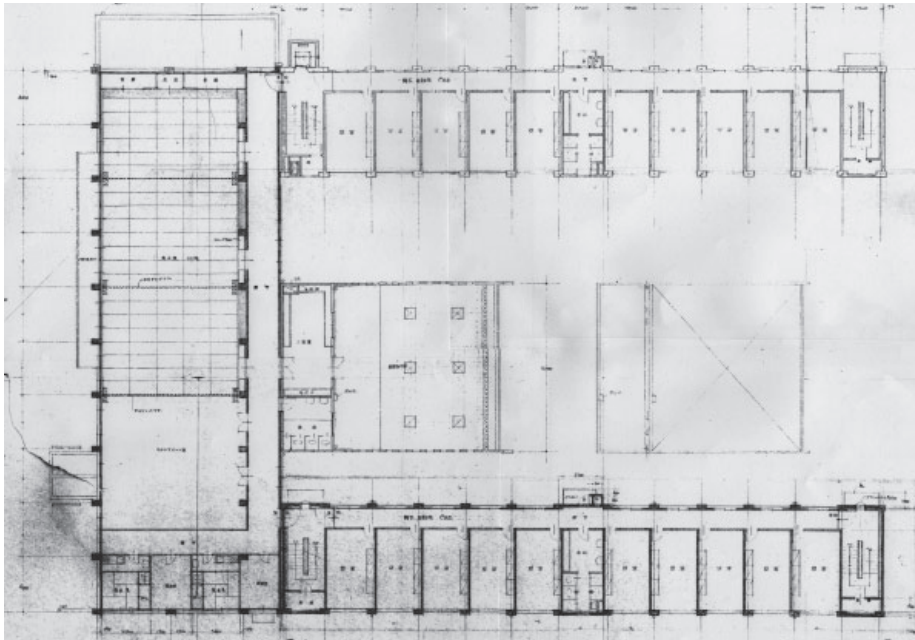


図5 月影寮平面図（下から1階・2階）

北翼の寮室は5階建てでエレベーターが設置されている。北翼・南翼とも東西に長い短冊状の平面で、北側片廊下とし、寮室は全室とも南面させている。東西両端に階段を設置し、中央に設けた洗面・便所の左右に、廊下に沿って寮室が各5室、計10室を並べる。また洗面・便所の向かいには廊下を隔てて小さなバルコニーを設け、その横にはダストシュートを設置している。この配置は北翼と南翼の全階で同じであるが、北翼1階の西側3室が休養室兼医務室となっているので、合計すると寮室は87室である。1室4名¹²⁾が定員なので最大348名を収容できるようになっている。

両翼に挟まれた浴室棟の1階にはボイラー室、浴室、脱衣室、便所が配置され、2階は洗濯室・便所となっていて、バルコニーには洗濯物干場が設置された。

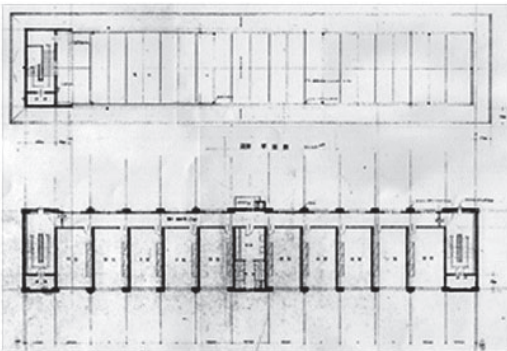


図6 月影寮平面図（下から3-4階・屋上）

4-2. 立面

管理棟の西側立面が正面となる（図7）。平家建ての建物に2階を増築しているので1階のシンプルな欄間付窓のデザインを踏襲し、集会室の西側全面を同じデザインの窓としている。陸屋根で同じ形式のアルミサッシの窓が整然と並ぶモダンなスタイルで、二燈寮のようなホローブロックやタイルは用いられていないため、図

面上では表情がないように見える。だが、バルコニーの腰壁（手すり）が張り出しているので、無表情の外壁のアクセントとなっている。

南側（図8）及び北側立面は窓が規則的に並び画一的に見えるが、外壁の大きな面は「アートガンリシン吹付」で仕上げ、柱形とパラペットはコンクリートを「化粧型枠打放シ」にしており、変化をつけている。縦板の型枠の木目がそのままコンクリートの表面に模様として表れるのを表情とする高度な技術を要する仕上げで、当時流行していたものである。外観写真では梁も横板を型枠としていたことがわかる。

北側立面は階段室に丸窓を配置し、中央には小さなバルコニーが張り出しているので、南側立面よりリズムカルな外観である。なお、手描きで非常用進入口を追加修正している。

4-3. 寮室

寮室の広さは壁芯々で幅3,500mm、奥行6,000mmで、面積は21.00㎡である。二燈寮と比較すると、7㎡弱ほど広くなり、奥行方向が長くなっている。寮室の平面詳細図（図9）にはロッカー3台と2段ベッド1台、1段ベッド1台が描かれているので、当初定員は3名だったとみられる（電気設備図ではベッドは3台入口付近に配置されている）。しかし実際は1名増えて4名になっている。二燈寮よりも床面積は広く法規上でも問題はなく、急増する学生数に対応したものだろう。図10は第一期工事の寮室展開図である。室内にはドアの吊り元に近い内壁に沿ってロッカーが3台並ぶ。1台は幅1,100mm、奥行が600mm、高さ2,600mmなので収納力は十分ある。

寮室棟矩計図によると、1階の寮室はスラブまでの高さが高いので天井が貼られている。2階・3階はスラブが天井と階上の床を兼ねているが、最上階は天井が貼られている。床はパーケット

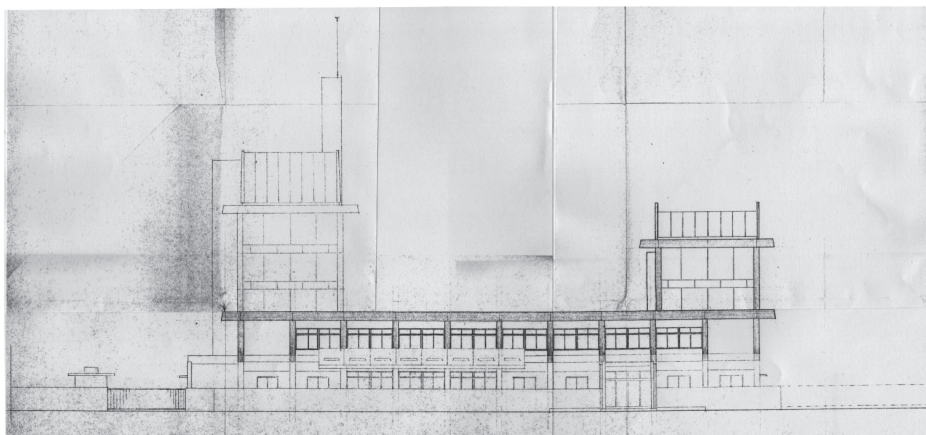


図7 月影寮西側立面図

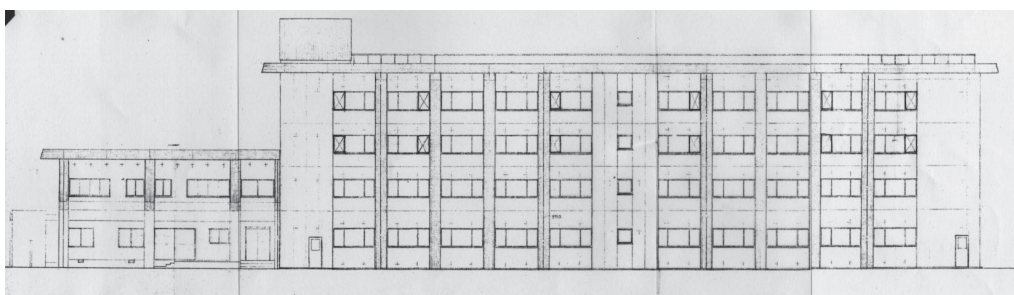


図8 月影寮南側立面図

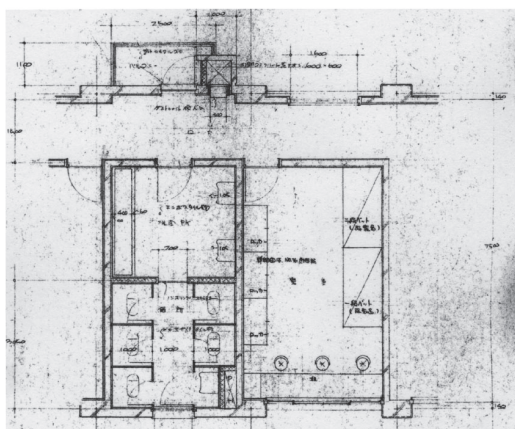


図9 月影寮寮室・便所・洗面所・廊下平面図

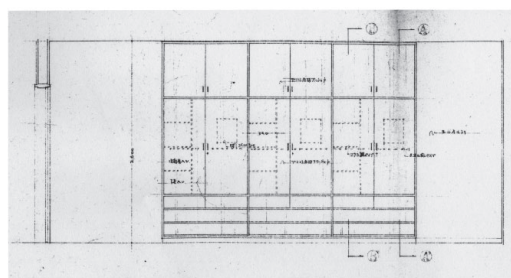


図10 月影寮寮室展開図

房機が設置されており、照明器具が2箇所、2口コンセントが4箇所ついていた。

4-4. 設備

フロア貼り、壁はクロス貼り、天井は吹付仕上である。

設備図によると各寮室の窓下にはスチーム暖

浴室の詳細図と給排水衛生設備図が添付されていないので詳しいことはわからないが、大きな浴槽が壁際に設置され、洗い場には蛇口を設

置できる腰壁も3連描かれている。脱衣室には着替えのスペースの他に浴室入口付近に流し台らしきものが描かれている。洗濯用かあるいは洗髪用に使用されていたように思われる。

水洗式の和式便器が全館各階に設けられている。寮室棟の中央に設けられた水廻り設備は手前が洗面所、奥が便所で和式便器が5台設置されている(図9)。

スチーム暖房設備も全館各階に設置されている。

4-5. 構造

ラーメン構造の鉄筋コンクリート造である。管理棟は東西方向の柱間が5,500mm、南北方向の柱間が4,000mmである。寮室棟は東西方向の柱間3,500mm、南北方向の柱間が7,500mmである。

管理棟・寮室棟・設備棟とも屋上はパラベットの陸屋根で、寮室棟屋上には手摺りがついているので出られるようになっていた。

5. 二燈寮と月影寮の比較による考察

以上、二燈寮と月影寮の建築構成について詳しく見てきたのでここでは2つの寮を比較することで、共通点や教育目的との関連性や建設意義を明確にしたい。そこで以下の表を作成した。ただし二燈寮は第一期工事のものしかわからない。

配置計画について、正面に管理棟、その背後に寮室棟と浴室棟を配置する形式は二燈寮のものを踏襲して月影寮が計画されている。どちらの寮も敷地は東西に長いので、採光を考慮し寮室等を南面させている。ただし二燈寮の寮室棟は道路が北側にあるので管理棟とは平行に配置され、月影寮の寮室棟は西向きの管理棟とは垂直に配置されるが、ゾーン構成は同じである。また、管理棟の玄関を中央からずらし、右手に事務室、左手に食堂を設けることや、管理棟正面に植栽スペースをコンクリート造のピットで一体化して造っていることも類似している。

表 二燈寮と月影寮の比較

	二燈寮	月影寮
竣工年	1963(昭和38)年第1期工事、1965(昭和40)年第2期工事	1968(昭和43)年第1期工事、1972(昭和47)年第2期工事
閉寮	1981(昭和56)年	1994(平成6)年
構造	鉄筋コンクリート造(4階建て、2階建て、平家建て)	鉄筋コンクリート造(5階建て、4階建て、2階建て、平家建て)
収容定員	210名(76室、1室3名)(第2期工事竣工後)	348名(87室、1室4名)
建築面積	821.19㎡(第1期工事竣工後)	1943.43㎡(第2期工事竣工後)
寮室床面積	14.36㎡	21.00㎡
管理棟	玄関、応接室、事務室、管理人室、台所、和室、便所 食堂、厨房、食品庫、便所、カウンセリング室	玄関、面会室2室、事務室、管理人室、台所、和室、便所 食堂、盛り付けスペース、食器洗浄消毒格納スペース、二次加工処理スペース 集会室(仏間付和室110畳)、ミシンアイロン室、寮母室(2室)、医務室(2室)
浴室棟	浴室、脱衣室、ボイラー室 娯楽室、ピアノ室(3室)、ミシン・アイロン室	浴室、脱衣室、ボイラー室 洗濯室、便所、物干場
寮室棟	寮室、宿直室、休養室兼医務室、洗面・便所	寮室、休養室、洗面・便所

※二燈寮の建築面積以下のデータは1期工事竣工後のもの(2期工事竣工後の図面等書類がないため)。

二燈寮の第二期工事の平面図がないのでわからないのだが、『自校史を学ぶ』¹³⁾によると、「集会室（ホール）」があったと書かれている。第一期工事では集会室とみられる娯楽室は浴室棟の2階にあり、ピアノ室とミシン・アイロン室へ行く手前に通過する空間となっているので落ち着くようには感じられず、ましてや寮生全員が集まるような部屋ではない。おそらく第二期工事で建設された別館に「集会室（ホール）」があったのだろう。月影寮では第二期工事で管理棟2階を増築し、仏間のついた110畳の大広間をつくった。この大広間に付設したミシンアイロン室を合わせると寮生全員が集まることも可能である。この大広間の正面には仏像が安置された仏間があり、「その前で二年間の学生生活の無事を願い、また二年間の学業の成果を誓うという入寮式が行われた」¹⁴⁾という。このことは建学の精神にも一致しており、この仏間のある大広間が家政短期大学の学生寮としての最大の特徴といえるだろう。寄宿舎に仏像が安置されているということは、何かしらこまった雰囲気をつくる。寄宿舎はプライベートな生活空間であり、自治ができる場であるが、一方でこのこまった雰囲気は仏教精神に基づいて人間教育が実践されることにつながり、起居を通して育まれていくのだろう。

他に、家政短期大学のカリキュラムとの関連では、服飾意匠学科と幼児教育学科に所属する寮生たちに必要なミシンアイロン室とピアノ室が配置されていたことも本学の学生寮の特徴である。学生たちが各科目で与えられた課題をこなすのに必要な空間と機材を置いていたといえよう。

また月影寮は二燈寮に比べて規模が大きく、寮母室・医務室・面会室等が複数置かれ、管理体制が整えられたことがわかる。寮生が急増し、

寮室が3人部屋から4人部屋となり、浴室や脱衣室も収容人数に合わせて広がっている。

一方で現在の集合住宅ではほとんど使われていない設備や場所がある。それは、寮室の廊下のダストシュート、脱衣室や洗面所の洗髪器などの設備である。和式便器もそこに加えることもできよう。1970年代まではそれらは広く使われていたように記憶するが、ダストシュートは衛生面が、和便器は機能面が適しておらず、短期間に消え去っていった。また図面では屋上に手摺りがついており、ふだんから外に出られる場所として活用されていた。宇治川の花火大会なども見られた可能性もある。しかし現代では安全面から屋上は活用されない場所となり、設計上でも機械類の設置場所としての使用以外の活用は想定されていない。

6. おわりに

『自校史を学ぶ』¹⁵⁾には「社会情勢の変化により、…本学が運営していた学生寮はすべて役目を果たし、その任を終えた」とあり、月影寮は、一部クラブボックスやピアノレッスン室に活用されてきたが、2006（平成18）年に取り壊された。

鉄筋コンクリート造の建物は法定耐用年数が住宅用で47年と想定されているが、二燈寮は18年、月影寮は26年が学生寮として使用された期間で、非常に短い。なぜ短いのだろうか。高度経済成長期にこのような建物は多く造られたが、1981年に建築基準法が改正され、新耐震基準が適用されると既存不適格物件として耐震化工事が必要となった。安全性を考えるとメンテナンスせずに建物を維持するのは困難であろうし、また経済性・安全性や衛生面からも学校側のリスク回避も背景にはあろう。同時にワンルームマンションに住みたいと希望する学生の

増加も拍車をかけた。建設当初流行したダストシュートや和式便器等、設備の陳腐化も甚だしい。設備は容易に変更・更新できる構造にしておくことが肝要である。また間取りの変更も容易にできることが望ましい。

現代では若者にシェアハウスが人気である。自分専用の個室は確保しながら食堂やキッチンやサロンなど共有スペースを設けて、他の人とのコミュニケーションを積極的にとってというスタイルの居住施設である。授業でシェアハウスに住みたいかどうかを尋ねると、絶対イヤと答える学生もある程度存在するが、意外にも楽しそうだから住みたいと答える学生も少なくない。

スマホが普及し、SNSの活用により個人がたやすく他の人とつながる機会が多くなっている。そのつながりは私にはとても危うい関係に思える。「同じ釜の飯を食う」という言葉があるように、食べるという行為を共にすることにより、連帯感が生まれる。すなわち同じ年代の若者どうしが学生寮で寝食を共にすることでコミュニケーション力やリーダーシップ力が得られ磨かれるように思える。人生の一時期に生身の人間どうしでぶつかりあうことは、その後の人生に良い影響をもたらすに違いない。

月影寮の最後の寮生たちの多くは、2年間月影寮の寮生でよかったと思っており、その理由に「楽しかった」、「たくさんの友達ができた（友達に出会えた）」ことを多くあげており、「みんながいてくれて心の支えがあった。（特に地震の時）」という理由もあった¹⁶⁾。彼女たちは阪神大震災の震度5を経験することで一人暮らしの弱点も理解できたのではないだろうか。昭和の時代の学生寮は建物も生活環境もレトロでしかないが、今後は新しいタイプの学生寮が出現する

ことを期待したい。

謝辞

本研究にあたっては学校法人京都文教学園学園連携推進室係長の佐々江久美子氏、庶務部施設課と京都文教大学・京都文教短期大学総務部総務課からご協力をいただきました。ここに記して謝意を申し上げます。

注および引用文献

- 1) 西山卯三『住まい考今学 現代日本住宅史』彰国社、p.139 下段 14～20 行目
- 2) 前掲 1 同 p.141 上段 9～20 行目
- 3) 前掲 1 同 p.140 下段 1～8 行目
- 4) 本学の学生寮の歴史は京都文教短期大学『自校史を学ぶ』2010 を参照した。
- 5) 前掲 4 同 p.19 の 11～13 行目 開校時の学則第一条に「我邦の国体に鑑み素朴を旨とし、社会の進運に適應せる學術技芸を授け、家政整理に堪能なる良妻賢母を養成するを以て目的とする」とある。
- 6) 前掲 4 同 p.20 の 12 行目
- 7) 前掲 4 同 p.42 の 9 行目、また同 p.42 の 6～8 行目には、短期大学学則第一条に「仏教精神に基づき、教育基本法及び学校教育法の趣旨に則り、家庭生活に必要な知識技能を与え、高い教養と正しい批判力を養い、以て健全な家庭人、有能な国民としての女性を育成する」とある。
- 8) 前掲 4 同 p.224 の表に「短大二燈寮別館増築」とある。
- 9) 前掲 4 同 p.154 の 10～11 行目
- 10) 前掲 4 同 p.153 の 8～9 行目に「寮室は七六室（一室三名宛収容定員は二一〇名）」とある。
- 11) 『思い出 purizumu』昭和 54 年度二燈寮文集の寮室内の写真
- 12) 前掲 4 同 p.154 の 10～11 行目に「（第一期工事で）寮室四八室（一室四名宛）」とある。また文集『お元気で』にも寮室 1 室に 4 名が生活していたことがわかる内容が記載されている。
- 13) 前掲 4 同 p.153 の 9 行目
- 14) 前掲 4 同 p.155 の 14～15 行目
- 15) 前掲 4 同 p.155 の 2～4 行目
- 16) 『お元気で』月影寮、1995（平成 7）年 2 月